

平成30年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

大口真神社

御嶽神社背後の御岳山頂に鎮座する大口真神社は、^{ひらからもん たまがき}平唐門と玉垣に囲まれた、^{ながれづくりかわらぼうどうばんぶき}流造瓦棒銅板葺の本殿に、見事な彫刻が施されています。ご祭神は御嶽大神のお遣いである狼（大口真神）で、古くは今の場所から80mほど奥の山中（禁足地）に、お食事である神饌を供える台があっただけでした。かつて、この深い森が生息域だったのでしょう。そして、埼玉・山梨・長野にまたがる山間では、狼を守り神と崇める風習があり、オオカミの姿を配したお札も、各地で頒布されています。



御嶽神社は家内安全・商売繁盛・五穀豊穰など、庶民の生活がより豊になるご神徳。奥宮の日本武尊は、強い運をもたらす神。そして大口真神（オオカミ）は、火災・盗難・病気など様々な災いから人々をおまもりする神と、御嶽信仰は三社の御神徳で成り立っています。特に、御嶽神社を崇敬されている方々にとって、江戸時代から変わらぬ護符は、毎年玄関や土蔵などに貼られます。御嶽信仰の中でも、最も馴染み親しまれるお札で、神社にとっても重要な位置づけとなりました。そのためか、狼の個体数減少のためか、江戸時代末期の安政5（1858）年頃社殿が建立されたようです。この社殿は、現在の社殿建立のため、昭和7（1932）年に富士峰園地の^{うぶやすしや}産安社本殿として移築されました。

現在の大口真神社について、新築時の資料によると、昭和6（1931）年3月8日に新築の決議がなされ、比企郡松山町（現東松山市）の宮大工である、雨宮松高に設計を依頼し、同年9月21日に仕様書と設計図が届きます。詳細に記された仕様書で、神社建築知識の豊富さに驚かされます。そして、翌昭和7（1932）年10月8日に解体工事が始まり、その社殿は地元の大工により産安社に移築されます。昭和8（1933）年1月7日に上棟祭が行われ、3月31日に竣工し、^{せんざ}遷座祭（ご神体を本殿にお収めする祭）が執り行われました。残念ながら昭和41（1966）年9月24日の台風で、門と玉垣は破損し解体されましたが、本殿は幸い難をのがれました。現在の門と玉垣は、平成11（1999）年に青梅市の補助事業で復元されたものです。

雨宮大工は、社殿建築だけでなく、彫刻も全て一人で手がけました。特に本殿の扉には、東松山市の花である「牡丹」の彫刻が施されています。大口真神社は、午前9時から午後

4 時の間参拝できます(但し、祭儀などで閉鎖する場合あり)。

※文化財ニュース第 350 号(平成 28 年 12 月 15 日)「産安社」で、移築を昭和 12 (1937) 年としたのは昭和 7 (1932) 年、大口真神社新築を昭和 17 (1942) 年としたのは、昭和 8 (1933) 年の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

(文責 須崎 直洋)

